抄録

『心のデザイン：心を創発する脳と身体』

大平英樹（名古屋大学大学院環境学研究科 教授）

ものごとが予想どおりに進行し困難がない時、私たちは心の存在を意識しない。思わぬ事態が生じ、迷いや葛藤に直面した時にこそ、自らの心が実感を伴って体験される。そこでは、内臓など身体状態の知覚、つまり内受容感覚が重要な役割を果たしている。内受容感覚は、脳の島という部位で形成されると考えられており、身体の快不快の感覚、自己の存在感、行動の自己主体感、時間の知覚、そして意思決定などの、多様な心のあり方に深く関わっている。こうした現象は、ジェームズにより120年前に提唱された「情動の末梢起源説」を彷彿とさせ、心理学における古くて新しい問題を喚起する。ここではこの問題について、最新の研究知見を基に考えていきたい。

『心のデザイン：精神医学の立場から』

村井俊哉（京都大学大学院医学研究科 教授）

人が社会生活の中でうまくやっていくことができるための心の仕組み、それが「心のデザイン」であるとするならば、精神科疾患を持つ人では、こうした「心のデザイン」に何らかのトラブルが生じている、という言い方ができるかもしれない。その場合、精神科医の役割は、「心のデザイン」の複雑な地図の中で、そのトラブルがどこに生じているかを特定し、効果的な治療方法を提供していくところにあると言える。一方で、どのような「心のデザイン」を良いデザインとするかあるいは悪いデザインとするかは、判断する側の価値観が大きく関わってくる。価値の多様性、生き方の多様性に寛容な社会を後押しすることも、精神科医の役割には含まれる。

『心のデザイン：文化心理学的アプローチ』

増田貴彦（カナダ・アルバータ大学心理学部 准教授）

過去30年、文化心理学では、文化が人の心を「デザイン」し、また同時に人の心が文化を「デザイン」するという相互構築プロセスを明らかにすることを目指している。本講演では、人の基本的な心理過程のひとつである「ものの見方＝注意プロセス」においても洋の東西で違いがある点に着目し、（1）文化が人の注意プロセスに深く影響を及ぼすことを示した神経科学的データ、（2）人の心が作り出す視覚表象文化（絵画・写真など）においても注意プロセスの違いに起因した差異が見られる点を示した人文科学的データ、（3）コミュニケーションを通して文化特有の注意プロセスが親から子へと伝達されることを示した発達科学的データを紹介する。

『心のデザイン：発達心理学的アプローチ』

子安増生（京都大学大学院教育学研究科 研究科長・教授）

この講演では、直前のシンポジウムの討議内容を受けて、心というものがどのようにデザインされているかについて、発達心理学の観点から考察する。脳の構造／機能が本質的に有する特徴であるモジュール性から構想された多重知能理論、ホット／クールシステムあるいは「妄想と検証」という心のはたらきの拮抗作用、様々な制約を受けつつも子どもが重要な機能から獲得していく発達過程、その定型発達の研究が非定形発達の子どもたちの理解にどのように貢献しうるかなどの問題について検討する。「子どもは省略の天才である」ということが論者の辿り着いた結論の一つである。講演の末尾に、研究者としての論者自身の発達過程について省察したい。

2016.3.25